

人それぞれ

2022. 5. 26

何かいいことがあって「おめでとう」とまわりの人から祝福されたとする。世間的な尺度で捉えれば、これは「幸せ」と言えるのかもしれない。しかし、そうした幸せの感覚がすべて万人で共有できるものなのかという、それは違うように思う。

人は、幼少期から今に至るまで、乗り越えることが困難な経験をしてきていると、なかなか安直には幸せという感覚を受け入れられない質（たち）になってしまうのではないか。表面上は嬉しいそぶりはしていても、内心は幸せへのブレーキを踏んで猜疑心をもってしまうのである。手放しでは幸せを受け止められないのである。

一方、楽天的というか、いい意味で素直なタイプの人、嬉しいことや喜ばしいことがあると、心から幸せを感じる人もいる。満面の笑みである。

この世の中には、家族や帰る家のあることこそ幸せだと捉える人もいれば、束縛のない自由奔放な風来坊的な暮らしが幸せだと感じる人もいる。名誉や物欲を満たすことで幸せだと感じる人もいれば、戦火から逃れ、命があるだけで究極の幸せを感じる人もいる。

生きることに挫けないためにも幸せは必要である。人間がそれぞれ生み出す幸せは、果てしなく多様であり、そしてその価値は、押し付けるものでもなければ、押し付けられるものでもない。幸せとは、人それぞれである。

以前は、自分が幸せかどうかなど考えもしなかった。ところが、ここ数年、いろいろな本を読んでいると、一定の割合で幸せとか幸福論に遭遇する。世の中のニーズなのであろう。そこで、考えてみる。自分は、果たして幸せなのだろうか。

自己分析をしてみると、幸せへのブレーキを踏むタイプのように思う。少なくとも手放しで幸せを感じたことはない。かといって、不幸と思ったこともない。幸せに対して、いつも一定の距離を保っているところがある。

だが、このところ、少しずつ変わってきたように感じる。自分が少しでも幸せだと感じると、人に感謝の念がわいてくる。「ありがとうございます」という気持ちである。ここまでくるのに随分と時間を要した。かなりの遅さである。

幸せとか辛さとか、人それぞれである。だからこそ、幸せとは難しいものである。意外と人は他人の幸せを勝手に判断しているところがある。人の感じ方や感情は、そんなに簡単なものではない。それでも、幸せを感じる時間や瞬間が少しでもあればと思う。これも人それぞれだが、見方を変えることで、身のまわりで幸せは見つかるものである。